

## ◆ 巻頭言

## 生きてるだけで百点満点！

## 安積 遊歩

娘は今年12歳になり、初めての年女だと喜んでいる。娘を妊娠したとき、私と同じ障がいをもつ子が来てくれると直感し、その通りになった。39歳まで妊娠しなかったので、一子子どもはもたないと決めていた。それなら世界中の子どもが自分の子どもだと考えよう、具体的にはフィリピンの貧しい子どもたちへの支援を1991年から始めた。私の子育ての根幹にあるポリシーは、自分の子どもが血族であるか否かにこだわらないことだ。

おとなを完全に信頼して生まれてくるすべての子どもたちの期待に応えたいと、先日もフィリピンに行ってきた。貧しい子どもたちの多くが学校に行かずに、ストリートチルドレンをしている。花を売ったり、駐車場に入り込み頼まれもしない誘導をしてお金をせびったり、ありとあらゆる工夫と生命への誠実さで家族や仲間と助けあって生きている。彼らに会うと、日本の子どもたちがいかに数字で評価され、点数で切り刻まれ、苦しんでいるかが見える。子どもたちが生きていることそのものを愛するのではなく、点数や順位をつけ、競争させまくり、まるで生きていていい人間と悪い人間がいるかのようだ。日本に住むおとなのほとんどは、数字やお金や物の持ち方で幸と不幸を測っている。それに対して、フィリピン社会の貧しい暮らしの中では、助けあうことやつながることが日本よりよく機能している。

私が学校で娘に点数をつけられたくないと思っていたら、娘は自ら学校を止めた。そろそろ5年になる。フィリピンの子どもたちにとっても学校は過酷な競争社会だから、小学生の40%はドロップアウトする。娘もフィリピンの子どもたちも、そして世界のすべての子どもたちが、私にとっては「生きている」というその一点で百点満点の素敵な子どもたちなのだ。すべてのおとなにそのことを思い出してほしい。



## PROFILE

安積 遊歩  
(あさか ゆうほ)

1956年福島県生まれ。生後40日目に障がいをもつと診断される。教育や結婚の中でさまざまな差別を受けるが、22歳のとき親元を離れ、自立生活を始める。渡米し(1983年)、帰国後、自立生活センター設立に参加。ピアカウンセリングを日本に紹介。フィリピンの子どもたちへの支援を開始(1991年～)。1996年、娘宇宙(うみそ)を出産。